令和5年3月31日

令和4年度 第8回西宮市民ファミリーハイキング事業報告

奥アンツーカ（株）

【実施日時】令和5年3月 30 日(木) 9:30～12:10

【実施概要・コース】

令和４年度の最終のハイキングは、例年より早く見頃を迎えた桜の時期に、夙川河口から御前浜に出て西宮砲台を見た後、御前浜橋（跳ね橋）を渡り、西宮浜の海沿いに半周できる遊歩道を歩いて新西宮浜ヨットハーバーをめざしました。

この日は、ガイドが案内するガイド案内型のハイキングに31名、受付で地図や見どころを書いた資料を受け取って、自分で歩く自由参加型のハイキングに5名が参加しました。

見どころ1　西宮砲台

兵庫県西宮市西波止町、御前浜公園の浜辺に残るのが西宮砲台跡。幕末、アメリカのペリー浦賀来航やロシア船ディアナ号大阪湾来航などにより、海防に不安を感じた江戸幕府は大阪湾岸の防備（摂海防備＝摂津国の海岸部の防備）に着手します。文久3年（1863年）に着工し、慶応2年（1866年）完成したのが西宮砲台です（国の史跡）

文久3年（1863年）3月、勝海舟の建議により、摂海防備における砲台の位置を湊川、和田岬、西宮、今津に定め、大坂町奉行所役人、西宮地付同心の立ち会いのもと、西宮、今津両砲台の工事は並行して進められました。

着工は文久3年8月3日（1863年9月15日）、工事を請け負ったのは、幕府廻船方御用達・嘉納次郎作。

石材は白石島、北木 島、真鍋島（現・岡山県笠岡市）などから運んでいます。

高さは約12m、内径約17m、壁厚1.21mの石造円堡。外壁は漆喰仕上げ、内部は3層という頑丈な造りです。筒口を四方に向ける装備で、空砲を試射したところ砲煙が砲台内に立ちこめたため、一度も使用されずに明治維新を迎えています。

明治17年（1884年）の火災で2階の木造構造部分を焼失していますが、砲台石郭部は建築当時の面影を残しています（昭和53年(1988年)、内部の鉄骨による補強、天井設置など改修作業を実施）。

(参考:日本旅マガジン　兵庫県　西宮砲台跡 HP　https://tabi-mag.jp/hg0111/)

桜が満開の夙川公園を河口まで歩いて御前浜に出て、西宮砲台の前に向かいました。砲台前で説明を聞きました。

その後、マリナパーク（西宮浜）の護岸を海風に吹かれながら半周し、初級コースは終了、

新西宮ヨットハーバー付近には桜並木があり、満開の花見を楽しみました。

見どころ2　新西宮ヨットハーバー・桜並木

新西宮ヨットハーバーは、親水機能や安全な海洋性レクリエーションの場を創造することを目的とし、規模は面積約 35ha、収容能力 700 隻と国内最大級で、神戸・大阪から車で約 30 分とアクセスもよく、ゆったりした桟橋風景等が人気で、多くの人々から親しまれています。

また、センターハウスにはレストラン・ショップ等のほか、海洋冒険家・堀江謙一さんのミニマーメイド号（実物）を展示しています。

（参考：国土交通省神戸運輸管理部 HP　https://wwwtb.mlit.go.jp/kobe/kengakudemae/01kengaku/shinnishi.html）

■桜(さくら)の街・西宮のお花見スポット西宮浜の桜並木

西宮浜のマリナパークシティは、平成 10 年(1998 年)3 月に街開きされた新しい街で、景観とアートにこだわり、街づくりが進められました。このマリナパークシティ内に、地図上で夙川をまっすぐ南へ伸ばした延長線上に桜並木が造られ、今では西宮市屈指の桜の名所にもなっています。

（西宮流「桜（さくら）の街・西宮のお花見スポット」HP
https://nishinomiya-style.jp/blog/2023/03/01/34737#index5/）

続いて希望者は、新西宮ヨットハーバーを出発、海水面より16mほどの高さがあり眺望の良い西宮大橋を渡り、旧辰馬喜十郎邸を訪れました。

見どころ3　旧辰馬喜十郎邸

白鹿酒造記念博物館の西側にある洋風建築で、1881年(明治21年)に、日本人の大工の手で建てられました。辰馬喜十郎邸は、辰馬本家から分家した南辰馬家により建てられましたが、現在は非公開になっています。建築当時は「神戸旧居留地の英国領事館を模すように。」と命じられたと言われています。前の生垣の横に続くレンガ塀と共に、かつての阪神間モダニズムの名残りが感じられます。

また、兵庫県の近代歴史遺産にも登録されています。

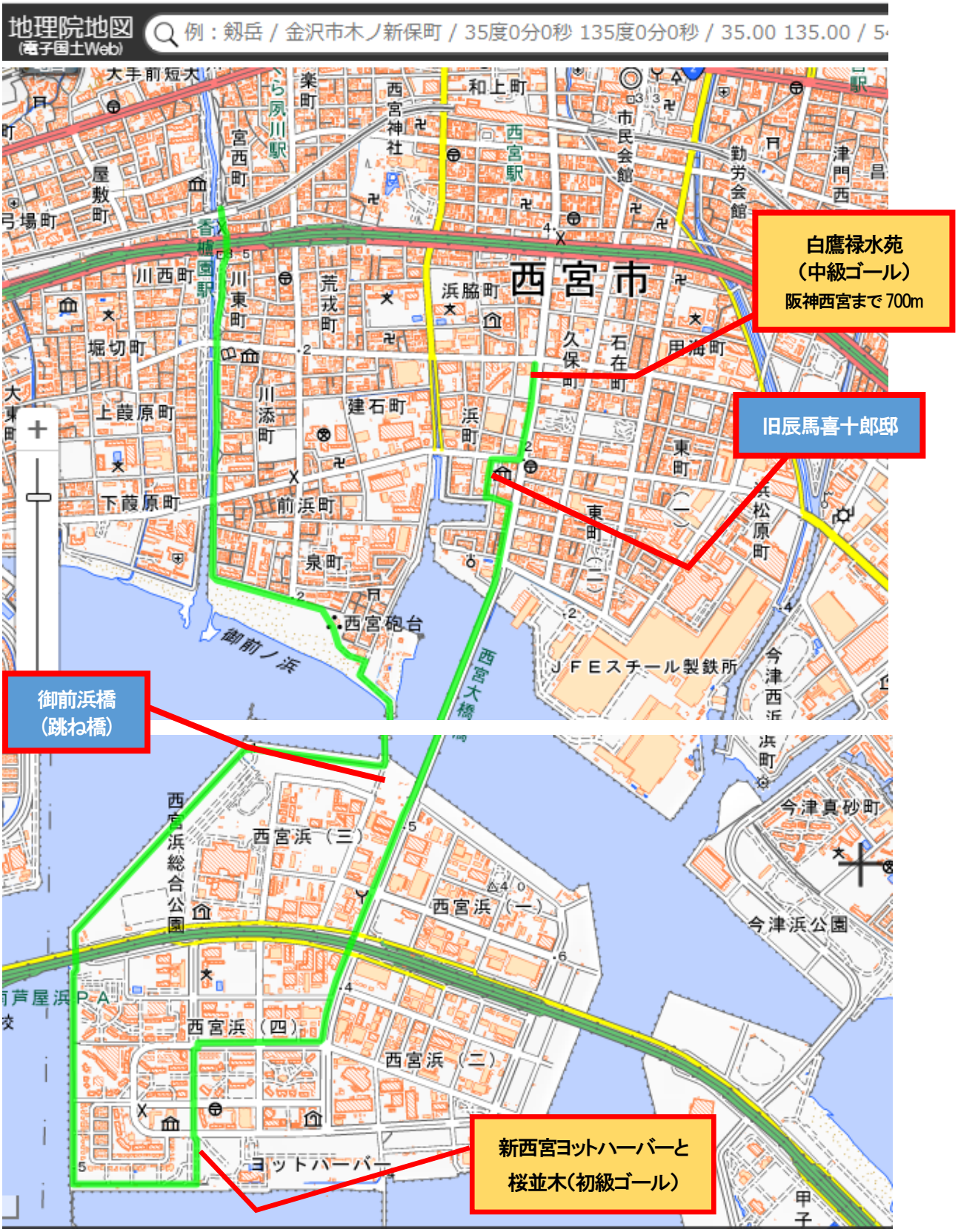
(参考：西宮流「辰馬喜十郎邸」HP　https://nishinomiya-style.jp/glossary/tatuumakijuurou/)

最後に、白鷹禄水苑を訪れ令和４年度のハイキングの最終回を終了しました。

見どころ４　白鷹禄水苑

戦前までの灘の造り酒屋の多くは、蔵元の住居と酒蔵が地続きになっている「内蔵形式」で建てられていました。蔵元の暮らしは文字通り「蔵」とともにあり、そこには酒造りとともに営まれる「暮らし」がありました。毎年変わらず繰り返される、その季節その時々にしかない仕事や行事、それをゆっくりと見守る時間。造りとともにこうした暮らしの原点も見つめていきたいという考え方に基づき、白鷹禄水苑は建てられました。

白鷹禄水苑は、かつてこの地にあった白鷹の蔵元、辰馬家の住居をイメージ再現した建物で、ショップ、レストラン、日本酒バー、多目的ホールに加え、江戸末期から昭和初期にいたる蔵元の生活道具を展示しています。

白鷹禄水苑のホームページには、「今よりもはるかに時がゆっくりと流れていた時代のスローライフは、「酒を楽しむ」ということも含めた豊かな食文化を考える上で、とても良いお手本になるのではないか」と書かれています。　（参考：白鷹株式会社HP　https://hakutaka.jp/blog/article.html?page=43/）

令和4年度　第8回ハイキング（夙川公園、御前浜・西宮砲台、御前浜橋(跳ね橋)、新西宮ﾖｯﾄﾊｰﾊﾞｰ・桜並木、白鷹禄水宛)の行程図　（地理院地図より）